

大川周明『回教概論』の周辺

大東亜共栄圏におけるイスラームの位置づけをめぐって・上

稲賀繁美
国際日本文化研究センター
総合研究大学院大学教員・

大川周明の『回教概論』(昭和17年)は、当時の日本にあっては画期的なイスラーム研究の達成とされる。その序文には、「いまや大東亜共栄圏内に多数の回教徒を包容するに至り、回教に関する知識は国民にとって必須のものとなった」との認識が示される。とかく大東亜共栄圏とは、東亜の盟主たらんとした日本の国粹主義が対外膨張論と結託した誇大妄想と見なされてきた。ところが、大川はイスラームによる世界征服の可能性すら見込んでいたのではないかと、後年、竹内好は述べている。大川自身には、直接そこまで踏み込んだ発言は見当たらず、竹内はいったい何を根拠に、との疑問を松本健一氏も呈している。だがこれは、竹内が大川周明に事寄せて、自らの夢想を暗に披瀝して見せたものではなかったか。『回教概論』成立期の知的環境のあらましを振り返ってみたい。

1939年6月22日、回教圏研究所所長の久保幸次による「支那回民に告ぐ」は、中国語訳により東京中央放送局からラジオ放送されている。この演説は「東亜共同体的工作」へのイスラーム教徒の参画を訴える。同じ久保は、1942年の日米開戦直後には、『回教圏』(6巻1号)に「大東亜戦争と回教圏」を発表し、回教圏

研究が、「支那」やインドネシア理解に必要なばかりか、「早晩再開されるべき西アジアとの現実的交渉」にあっても裨益するであろう、との見解を示す。大東亜共栄圏の設営にあたって、いかにイスラーム教徒の民族主義高揚を手なづけ、抗日運動からは引き離して、味方に引き入れるか、が模索されていた。

1943年11月、回教研究に關係した各種団体が集まって外務省で学術報告会が催される。大久保幸次が所長の回教圏研究所、大川周明が所長を務める東亜経済調査局・回教班、陸軍大将林銑十郎を会長とする大日本回教協会などが参加している。この席で回教圏研究所の野原四郎は、「回教徒問題について」との報告で、「回教民族」という言葉を問題にし、部族名としてではなく、民族運動の主体としての「民族」のありかたを把握することが、民族政策上必要との見解を述べている。野原の回想では、この会合で竹内好も発表したという。

(以下次号)

*柳瀬善治「戦前期における〈回教〉をめぐる言説・研究序説」『近代文学試論』40号、2002年を参照させて頂いた。なお上に示した私見は、都立大学における研究会「大川周明のアジア主義と今日のイスラーム研究」(2005年2月28日)に於ける、筆者の発言に基づくことをお断りする。

思

考

の

隅

景

1943年の回教研究の「学術報告会」に先立つ時期、竹内好はすでに「大東亜共栄圏と回教圏」(『支那』東亜同文会編集部1942年7月)で、「宗教的特性として現世的」な「回教徒」は「東アジアだけに一億」存在し、それを真剣に考慮することなくして、「大東亜共栄圏の理想」完成は不可能との見解を示していた。旧国民政府は、国内統一のため回教徒にも中華民族たる自覚を吹き込もうと努めたが、この「単一民族論」は重慶政府に引き継がれた。その一方、満州事変によって日本の支配が確立して以降、「北支」には中国回教総連合会、「西支」には西北回教連合会が、ともに日本主導で結成され、ここでは「民族問題を表面に出さず」に、経済的・文化的地位の向上が目指されている。

竹内はこの日本の政策を「賢明」と評価し、また回教も「宗教である限り」「ある意味の後進性は免れない」とする。その一方で、自ら現地調査に当たった体験を生かした竹内は、日本人による回教徒啓蒙運動が、神社参拝の奨励ゆえに、現場で矛盾を露呈せざるを得ない様子にも、「訓練にあたっている一青年の述懐」を借りて言及してみせる(「北支・蒙疆の回教」『回教圏』1942年6月)。

当時、神社参拝とイスラームの信仰とをいかに両立させるかは、いくつかの議論を呼んでいた。「神祖 天の御柱の尊」をアッラーの神と同一視して、両者を無

大川周明『回教概論』の周辺

大東亜共栄圏におけるイスラームの位置づけをめぐって下

理やり統合しようとする逆本地垂迹説の議論(有賀文八郎「日本に於けるイスラーム教」、田中逸平〔編〕『回教及回教問題』〔1935〕所収)もあれば、原正男の『日本精神と回教』(1941)のように、「日本精神」を国家意識と不可分とする一方、回教の絶対神は「靈的存在」と規定して、宗教と国家との衝突を回避しようとする詐術的な論理操作も見られた。

そうしたなか、竹内好もまた、時局柄ゆえか自己の見解は隠蔽しつつ、「回教」の高い順応性を大乘仏教の「寛容性」と類比して捉える紋切り型の議論に逃避してはいる。とはいえ竹内好が大川とともに「メッカを故郷として不断の交通を行う」回教文化圏の有様に、国家(nation)や民族(race)を超えた共同体の夢を垣間見たことは、否定できまい。その限りでは、「マレーに於ても又はジャワに於ても、宛も故郷に在ると同様」の「回教国 Dal al Islam」の観念を説明して「回教の世界征服」(中公新書版15頁)に言及する大川周明の『回教概論』序文は、竹内好にとって、国家を超えた宗教民族主義という、いわば禁断のユートピアのネガでもありえたのではなかったか。

*柳瀬善治「戦前期における〈回教〉をめぐる言説・研究序説」『近代文学試論』40号、2002年を参照させて頂いた。なお上に示した私見は、都立大学における研究会「大川周明のアジア主義と今日のイスラーム研究」(2005年2月28日)に於ける、筆者の発言に基づくことをお断りする。

稲賀繁美

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教員